



臺高·師大通訊



校長的話

淬鍊智德七春秋

李登輝總統
為我上的最後一堂課

民主先生
李登輝與臺北高校

蕉兵會的成立
及其活動

蕉葉與木鐸：
從百年學校記錄／
轉譯國家與地方文化記憶

臺高通訊要聞

典藏臺北高校

通訊聯絡欄

臺高·師大百周年

NO.02

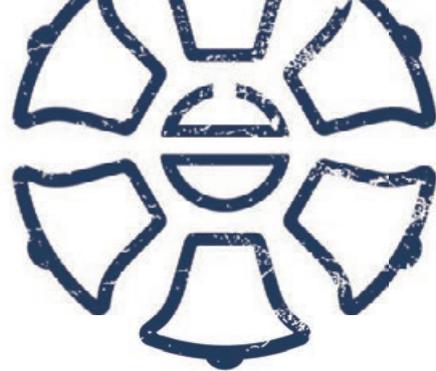
2020.OCT



contents
目録

校長的話	2
学長のごあいさつ	2
淬鍊智徳七春秋	4
智徳みがくや七春秋	4
李登輝總統為我上的最後一堂課	8
李登輝總統の最後の授業	8
民主先生李登輝與臺北高校	12
民主先生李登輝と台北高校	12
蕉兵會的成立及其活動	16
しょうへい会の成立とその活動	16
蕉葉與木鐸	20
從百年學校記錄／轉譯國家與地方文化記憶	20
蕉葉と木鐸	20
百年の学校記録／国家と地方文化の記憶の転訳	20
臺高通訊要聞	28
典藏臺北高校	32
通訊聯絡欄	34
臺高・師大百周年	38

校長的話



各位臺北高校的學長、家屬，以及所有關心臺北高校的朋友們，大家好！

《臺高·師大通訊》創刊號在推出之後獲得了熱烈的回響，也得到了很多的支持，非常感謝大家。

一所學校之所以偉大，除了在學術與教學上有傑出的表現外，更是源自於它的校友對社會所帶來的貢獻與影響。臺北高校在二十三年的歷史當中，培養出許多傑出的人才。在日本，臺北高校校友不乏知名學者、諾貝爾獎候選人、企業家以及在政治界活躍的人物；而臺灣方面更是有中華民國總統、五院院長、市長、財經界領導者、教育家與文學家等等。當然，還有更多是在自己的專業領域中各擅勝場，以各種的方式，在時代的前進中奉獻一己之力的校友們。

然而在今年的夏天，臺北高校的校友——同時也是曾任中華民國總統的李登輝先生很遺憾地離開了我們。李登輝先生在臺灣的民主進程中扮演了非常關鍵的角色，關於自我的學思歷程，他經常說：「就

讀臺北高校的兩年半，影響了我一生要走的路。」臺北高校是這樣地影響了一位年輕人，並且透過他，進而也影響了一整個時代。所以在第二期的《臺高·師大通訊》當中，我們特別製作了李登輝學長的專號，來表達我們對他的尊敬與思念。

而時光匆匆，距離臺高·師大的百周年校慶已不再遙遠了。我們期待各位學長、家屬以及所有關心臺北高校的朋友們能夠與我們共聚一堂，一起慶祝這偉大學校的百歲生日。最後，祝福各位身體健康，諸事順遂！

國立臺灣師範大學校長 吳正己

吳正己

学長の ごあいさつ



台北高校 OB の皆様方、ご家族の皆様方、そして台北高校に関心を寄せて下さっている全ての皆様、こんにちは。

『台高・師大通信』創刊号におきまして、皆様より熱烈な反響と共に、多くのご支持をいただきました。ここに心より感謝申し上げます。

学校に対する社会の評価は、学術と教育の面で抜きん出ているか否かはもちろん、卒業生の皆様の社会貢献と影響力にも依ります。台北高校は二十五年の歴史の中で、多くの傑材を育成してきました。日本では、著名な学者、ノーベル賞候補者、企業家、政界で活躍する方が、台湾でも、中華民国総統、五院院長、市長、財政経済界のリーダー、教育家や作家などが多くいらっしゃいます。もちろん、他にも各自の専門分野で成功を収めている方々や、時代の変化の中で、様々な方法で自らの力のみで社会に貢献されてきた卒業生の方々もいらっしゃいます。

しかしながら、今年の夏、台北高校の卒業生であると同時に、中華民国総統でもあった李登輝先生が、とても遺憾なことに私たちの元を離れ、その天寿を全うされま

した。李登輝先生は台湾での民主化を進める上で非常に重要な役割を果たし、自身の経てきた教育や思想の過程についてよく「台北高校で勉強した二年半は、私が生涯で歩むべき道に影響を与えた」と言っておられました。台北高校はこのように一人の若者に影響を与え、更には彼を通し、彼の生きた時代全体にまで影響を与えました。このため、『台高・師大通信』第二号では、李登輝先輩の特別号を制作し、私達の彼に対する尊敬と惜別の思いをお伝えしたいと思います。

さて、時は流れは早いもので、台北高校・師範大学の創立百周年式典の日もそう遠くはありません。私達は諸先輩方、そのご家族、また台北高校に関心を寄せて下さる皆様と共に、この偉大なる学校の百歳の誕生日を祝えることを楽しみにしております。最後に、皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。（木立翼 訳 / 津田勤子 校訂）

国立台湾師範大学学長 吳正己

吳正己

「淬鍊智德七春秋」



臺北高校共有兩首校歌，而我特別喜歡第二校歌，尤其是它的第四段歌詞。第二校歌是由德語科教授西田昭一老師作詞、並由日本知名的作曲家山田耕作先生作曲。

迎接朝陽七星山 蘊染希望的色彩
夕陽之下淡水畔 思緒清澈猶似水
以此聖域為道場 淬鍊智德七春秋

歌詞中所出現的「七春秋」意味的是我
校 7 年制的中、高一貫教育（尋常科 4 年・
高等科 3 年）。尋常科的招生名額僅有 1 個
班級、40 位學生，被稱作「難關中的難關」。
在戰前日本共 35 所高等學校當中，也只有
9 所學校是採 7 年制。

我在 1940 年幸運地考上了尋常科。在
這四年當中儘管是戰爭期間，但依舊得以
接受傑出師資群的指導，並且在優秀同儕
們的啟發與競爭底下涉獵了各式各樣的書
籍。我盡情地投入喜愛的藝文活動，創作
詩歌與文章，更嘗試編輯傳閱雜誌和文藝
刊物，收穫良多。可以說，我的學術教養
與人格基礎，全都是在這「自主與自由」
的環境中培育而成。

1945 年，我升上高等科之理科乙組（醫
學系），但在第一學年結束時，全校師生都
被徵召進入日本陸軍。在那裡，我目睹上級
長官們不斷指使、虐待部下，甚至對他們發
洩暴力的可怕場景。

幸而，我們臺高生自成一個部隊，長官
也是受過教育的知識份子。比起作戰訓練，
我們更常被派去執行挖戰溝等勞力的工作。
也都和同學、學弟們一起吃飯睡覺，就像
是度過了五個月的宿舍生活一樣。在戰爭結
束的 50 年後，我與當時的戰友們第一次重新
聚首的集會，就是「蕉兵會」。

當時，我父母的故鄉沖繩被美軍佔領。
5 月 15 日，日本宣布無條件投降，臺灣歸還
中華民國，除了必要的留用人士以外，所有
的日本人都被下令撤離。這對我們這些出生
於臺灣的「灣生」來說，根本就是「放逐」。

所幸，復校的願望得以實現，並且在
1946 年 3 月的時候正式畢業，拿到成績證
明。這份證明成了我們回到日本之後插班進
入高校所必需的資料，不僅如此，這份證明
在美國也是大有用處的。

川平朝清

1927 年出生於臺灣臺中市，1946 年畢業於臺北高校（第 20 屆理乙班）。後來回到沖繩，曾於 1953 年留學美國密西根州立大學。致力於琉球廣播電臺的創立。1967 年擔任沖繩放送協會首任會長，1972 年出任 NHK 經營主幹。自 NHK 退休後，擔任昭和女子大學教授，曾任文學院長、副校長，目前為該校名譽教授。現居東京。



總之，我和母親、兄長一家人是在其他同學們都回到日本一年之後，才終於踏上當時仍受美軍佔領的沖繩，而那時已經是 1946 年的 12 月了。

正如母親所嘆息的：「有句話說『國破山河在』，如今卻是連山河都沒留下呢！」沖繩的島嶼一片殘破，對於灣生的我來說，那是我對父祖之地的最初印象。

我在沖繩得到的第一份工作，是擔任美軍政府的英·日文口筆譯。大戰方酣時整個社會瀰漫著摒棄敵國語言的聲音，但在臺北高校，幸好有堅持英語教育的必要性並親身實踐的中野賢作老師。拜他之賜，讓我有機會可以習得英語這實用的技能。

後來，也因為我曾經待過臺北放送局兒童劇團的經驗，而在美軍所設立的以當地居民為對象的電臺播音員。這是我離開醫學之路很大的轉捩點。

這條新的道路，令我得以在 1953 年獲得美國政府的獎學金，而前往密西根州立大學留學。當時聽從了一位了解我的學歷的美國傳教士的建議，我決定帶著成績單前往美國。

他們請曾經留學東京大學的教授認證，並將結果提交給大學教務長。他們所參考的是「經認可之國外大學一覽表」，而「Taihoku Koto Gakko」則是確然在列。臺北高等學校是受到國際認可的短期大學，也因此，我有 30 學分受到承認。如此一來，我只花了 3 年就讀完大學部，之後攻讀研究所，最後則是取得廣播經營的碩士學位。

正是因為受到臺北高校的教育和薰陶，才成就了今天的我。而當時的第二校歌第五段歌詞，在經過了 90 多年的現在，依舊是與繼承臺北高校的臺灣師範大學十分切合的。

以文化為傲的西歐 不再獨占鰲頭
我東洋的清新 文化日正蓬勃
我們心懷使命 蓄勢他日飛騰

（黃寶萱 譯 / 林中力 校訂）

昭和女子大學名譽教授
川平朝清

「智徳みがくや 七春秋」

台北高校には二つの校歌がありました。私の好きなのは、第二校歌の方で、その四番の歌詞が特にお気に入りでした。作詞はドイツ語教授の西田昭一先生、作曲は日本を代表する山田耕作氏です。

朝にのぞむ七星山 希望の色にはゆるかな
夕さすらう淡水畔 思念は水と清きかな
この聖域を道場に 智徳みがくや七春秋

歌詞にある、「七春秋」こそ、7年制中高一貫教育（尋常科4年・高等科3年）を意味しているのです。尋常科の募集定員は1クラス40人のみ。難関中の難関と言われていました。戦前、日本にあった35の高校のうち、7年制は9校しかありませんでした。

私は1940年、幸いにもその尋常科に合格しました。尋常科の4年間は、戦時中にもかかわらず、素晴らしい教師陣による授業、優れた同級生達に啓発され、競うようにいろんな本を読んだものです。好きな文芸活動にも打ち込み、詩作・創作に励み、回覧雑誌や文芸誌の編集経験もこの時期の良き収穫となりました。私の教養と人格形成の基礎は、この「自主と自由」の環境の中で培われたと言っても、過言ではありません。

1945年、高等科理科乙類（医学系）に進級し、1学年を終了すると同時に、全校教師も生徒も日本陸軍に召集されました。そこで垣間見たものは、上官達が部下を酷使し、虐待し、暴力を振るうおぞましい光景でした。

幸い私たちは、台高生だけの部隊で、教育を受けた上官に恵まれました。戦闘訓練よりも壕作りの労働などが多く、級友、後輩たちと寝食を共にした5ヶ月間は学寮生活のようなものでした。この時の戦友たちが、戦後50年経過してから、集まりはじめたのが「蕉兵会」です。

その間、私の父母の故郷沖縄は米軍に占領され、5月15日には日本は無条件降伏。台湾は中華民国に返還され、日本人は留用者を除き、全員退去を命じられました。私たち台湾生まれのいわゆる「湾生」に言わせれば「追放」としか思えませんでした。

幸いなことに、私たちは復校が叶い、明るく1946年3月卒業を認証され、成績証明書を受け取りました。これはもともと、日本に引き揚げた時、高校編入のため必要なものでした。それがアメリカでも役に立つことになるのです。

川平朝清

1927年台湾台中市生まれ。1946年台北高校卒業（第20期理乙）。その後沖縄に引き揚げ、1953年アメリカのミシガン州立大学大学院に留学。琉球の声放送（RBCの前身）の設立に尽力した。1967年に沖縄放送協会の初代会長就任、1972年からはNHK経営主幹を務めた。NHK退職後、昭和女子大学教授となり、文学部長、副学長を歴任、現在は同大学名誉教授。東京都在住。

それはさておき、私が母や、兄一家と、アメリカ軍が占領していた沖縄に引き揚げる事ができたのは、級友たちが日本に引き揚げてから1年もたった、1946年12月のことでした。

『「戦敗れて山河あり」と言うけれど、山河も残らなかったわね』と、母が嘆くほど、沖縄の島は破壊し尽くされていました。湾生の私にとっては、初めてみる父祖の地でした。

私がそこで最初に得た仕事は、アメリカ軍政府の、英語・日本語の通訳・転訳でした。戦時中敵性語排除の雰囲気の中で、台北高校では、断固英語教育の必要性を主張、実践した中野賢作先生の英断のおかげで、役にたつ英語力を身につけていたのです。

台北放送局児童劇団での経験をかわれて、1949年には、アメリカ占領軍が設立した住民向けラジオ放送局のアナウンサーとなりました。これが医学の道からの大転換となったのです。

その道は1953年、アメリカ政府奨学金によるミシガン州立大学留学へと繋がりました。その際私の学歴を知った、アメリカ人宣教師に勧められ、成績証明書を持っていくことにしました。

東京大学留学経験の教授に、証明していただき、大学教務部長に提出したところ、参照したのが「認定外国大学一覧表」。その中に Taihoku Koto Gakko が記載されていました。台北高等学校は国際的に認められた、短期大学だったのです。認められた単位は30、そのおかげで、学部を3年で終え、大学院まで進み、放送経営の修士号を獲得するに至りました。

今の私があるのは、台北高校での教育と薫陶があったからこそです。その第二校歌の5番は、90余年を経た今、台北高校を継いだ台湾師範大学にも相応しい詩文です。

文化を誇りし西歐に
今や榮華の日は落ちて

我が東洋に清新の
文化の辰あけんとす

使命は重し孜孜とし
て他日雄飛の準備せん

昭和女子大学名誉教授
川平朝清

李登輝總統 為我上的最後一堂課

國人敬重的李登輝前總統，在七月三十日下午七時蒙主恩召，雖然事前早已得知他玉體欠安，但在往生消息傳來時，內心仍有深深的不捨和哀思！

在我年輕的時候，偶而會陪同家父參加「臺北高等學校」和「日本京都大學」的同學會。李總統是家父的學弟，當時李總統先是擔任農復會農業經濟組組長，後來擔任行政院政務委員。李總統擔任總統以後，我第一次和他見面是在國科會傑出研究獎的頒獎餐會，當時我是最年輕得獎者之一，有幸和他同桌共餐。最後一次和李總統伉儷見面，是蔡總統在官邸宴請李總統伉儷，我和內人應邀當陪賓。在我印象中，李總統一向很健談，我總是當聽眾，除非李總統問話，我很少主動提出話題。

2017年3月29日，我為了李元簇前副總統的治喪事宜，特地到翠山莊請示李

總統是否要出席喪禮、是否要致辭？李總統很爽快地一口答應，他一一詳訴李元簇副總統的重要功蹟和貢獻，他認為李元簇副總統是他的得力副手，對他推崇備至！李總統認為臺灣的民主改革，李元簇副總統也扮演很重要的相助角色！李總統對副手的信任和關心，很令我感動。

原本以為當天只會耽誤李前總統15分鐘，沒想到李總統準備了很多談話資料，我們兩人聊了將近兩小時！他首先提到家父，一開始就從臺北高等學校、京都大學談起，他對當時學生們的深厚友誼十分想念，即使相差十多屆的畢業校友也是彼此熟悉，相互提攜，他也提到和家父都曾經在農林廳服務的往事。他的記憶力驚人，年輕時候唱的校歌都還記得，幸好我能夠哼上幾句一起唱和！他說當時的臺灣年輕人都熱愛自己的鄉土，也立志要使臺灣變得更美好！

陳建仁

臺北高校校友陳新安（第4屆文乙班）之子，中華民國第14屆副總統、中研院院士、流行病學及公共衛生專家，2003年曾出任衛生署署長，致力遏止SARS疫情流行。現為中研院基因體研究中心特聘研究員。



他接著提到臺灣農業經濟與農業發展的經驗，他如數家珍地談到臺灣農業發展的研究，對於發展農業科技、農產品行銷、確保農民收益和糧食充分供應，他都相當有心得。當然，對於他最新從事的源興牛復育工作，更是津津樂道！他提到源興牛的來源，與日本大學合作進行和牛與源興牛的基因體分析，評論和牛種源基因弱化的原因，以及源興牛如何改進和牛的培育等等，他都有豐富的學術原理和科學根據！以95歲高齡，仍然和我分享他的夢想，令我欽佩他的好學新知、博覽廣識、思想前瞻、勇於作夢！

他也和我談到衛生署和國科會的工作，他對全民健保的推行和科學園區的發展，一直相當關注也瞭若指掌，實在難能可貴！當他提到口蹄疫、SARS、禽流感等人畜共通傳染病時，就向李教授講課一樣，相當道地、也很到味！提到臺灣的健康照護者，

應該關懷貧病困苦、嘉惠婦孺老弱。他還特別帶我看彰化基督教醫院送給他的「耶穌在最後晚餐，幫門徒洗腳」的雕塑藝術品。他悲天憫人的胸懷，「民之所欲、常在我心」的真情流露，對我是很重要的啟發！沒想到原定15分鐘的請示拜訪，卻成了收穫豐盛、滿載而歸的寶貴一課，真是感謝讚美天主！

如今哲人已遠，深受世人敬重尊崇的「民主先生」、「寧靜革命家」、「哲學家總統」的肉身雖然已經離我們而去，但是他的精神必將永遠光照他熱愛的臺灣，庇護臺灣自由、民主、法治、人權的普世價值，能永續長存！

中央研究院院士
陳建仁

李登輝總統の最後の授業

我々国民が尊敬する李登輝前總統が、7月30日午後7時に神に召された。体調が芳しくないことは以前より知らされていたが、御逝去の知らせを受けた時から、今なお私の心には深い悲しみがある。

私が若い頃、時折父と共に「台北高校」と「京都大学」の同窓会に参加することがあった。李前總統は父の後輩で、当時農復会農業経済組組長を、その後行政院政務委員を務めた。彼の總統就任後、私が初めて彼にお会いしたのは国科会優秀研究賞授賞式の間だったが、当時私は最年少受賞者の一人で、幸運なことに李前總統と同じテーブルで食事をすることができた。そして、最後に李前總統ご夫婦にお会いしたのは、蔡現總統が彼らを官邸での食事会に招き、私と妻がご相伴役として招待された時だ。私の印象では、李前總統はいつもとても話し好きで、私は聞き手に回るばかりで、李前總統が質問をしない限り、私から話し始めることは少なかった。

2017年3月29日、李元簇前副總統の葬儀のことで、私は翠山莊に行き、李前總統に葬儀への出席や、弔辞の可否について伺った。李前總統は二つ返事で承諾し、

李元簇前副總統の重要な功績や貢献を一つ一つ挙げ、李元簇前副總統は彼にとって心強い助手だったと、心からの敬意を示した。李前總統は台湾の民主改革について、李元簇前副總統も協力者として大きな役割を果たしたと認めている。李前總統の彼に対する信頼と関心に、私は大変感動した。

もともとその日は15分お邪魔するだけのつもりだったが、李前總統が談話の為に多くの資料を準備してくださっていて私達2人はなんと2時間近くも話をしてしまった。彼はまず私の父について触れ、台北高校、京都大学について話し始めた。当時の学生同士の深い友情を懐かしみ、たとえ十数年ほど差がある卒業生であってもお互いによく知り、助け合う仲だったことを語ってくれた。彼は私の父がかつて農林庁に勤めていたことも話してくれた。彼の記憶力は驚異的で、若い頃に歌った校歌も覚えていたが、幸運なことに私も歌詞を部分的に知っていたので一緒に歌うことができた。彼曰く、当時の台湾の若者は皆自分達の郷土を愛し、台湾をより素晴らしい場所にしようと志を立てていたそうだ。

陳建仁

中華民國第 14 代副總統、中央研究院院士、疫学及び公共衛生専門家。2003 年に衛生署長を務め、重症急性呼吸器症候群（SARS）の対応に尽力した。今は中央研究院遺伝子研究センターの招聘研究員を務める。父の陳新安氏は台北高校の卒業生（第 4 期文乙）。

彼は続けて、台湾の農林経済と農業発展の経験について触れ、台湾の農業発展研究、発展農業科学技術、農作物のマーケティング、農家の収益の確保や食糧の十分な供給などについて語ってくれたが、高い見識を持っていたことを私は強く感じさせられた。彼が最近まで携わっていた仕事である源興牛の繁殖についても、楽しそうに話してくれた。彼は源興牛の起源についても触れ、日本の大学と協力して源興牛の遺伝子分析を進め、和牛の遺伝子が弱体化した原因と、また源興牛をどのように和牛の飼育に改善していけばいいか等について評論した。彼の話には豊富な学術原理と科学的根拠がある。95 歳という高齢であっても、夢について語る様子、そして向学心、幅広い知識、前向きな思想、夢を見続ける勇気に、私は心から感服した。

衛生署や国科会の仕事についても話してくれた。彼は国民健康保険の普及やサイエンスパークの発展について、ずっと関心があり、また詳しく知っていた。これは本当になかなかできることではない。口蹄疫、SARS(サーズ)、鳥インフルエンザなど、人畜共通の感染症について触れた時、私はふと李教授に講義をしてもらっているような、本格的な講義を受けているような

感じがしてならなかった。また台湾の医療専門家については、貧困に苦しむ人に配慮し、女性や子供、高齢者等を優遇すべきだと語ってくれた。彰化キリスト教病院から贈られたという「イエスが最後の晩餐で、弟子たちの足を洗う」洗足式の彫刻美術品をわざわざ見せてくれたりもした。こうした情け深さは、「民の望みは常に我が心に」という彼の本質を示し、私にとってとても重要な啓発となった。もともと 15 分だったはずの訪問は、思いもかけず収穫満載の授業となったのだ。神に心から感謝したい。

今では哲人は遠く離れてしまった。社会から深い崇敬を受ける「民主先生(ミスター・デモクラシー)」、「静かな革命家」「哲學家總統」の肉体は私たちの元を去ってしまったが、彼の精神は必ず、彼の愛した台湾を永遠に照らし続け、台湾の自由・民主・法治・人権の普遍的な価値を未来永劫護っていくだろう。（木立翼 訳 / 津田勲子 校訂）

中央研究院院士
陳建仁

民主先生李登輝 與臺北高校



李登輝前總統(1923-2020)為臺北高等學校第17屆文甲學生，於1941年入學，畢業後入京都帝國大學農學部就讀，為我國首任民選總統。

高等科一年級時(1941)

李登輝前總統曾說：「就讀臺北高校的兩年半，影響了我一生要走的路。」

李前總統於1941年考取了有菁英窄門之稱的臺北高等學校，就讀文科甲班。畢業後，先後攻讀日本京都帝國大學及國立臺灣大學；並於美國名校愛荷華州立大學及康乃爾大學完成農業經濟碩、博士學位。之後歷任臺北市市長、臺灣省政府主席、中華民國第七任副總統，並於1996年成為中華民國史上首位直接民選總統，被譽為「臺灣民主先生」。

在臺北高校求學時期，寬闊而深厚的學養風氣成為影響李登輝校友踏上民主改革之路的關鍵。在當時，同儕之間的聊天話題是馬克思、歌德、康德、蘇格拉底等西方哲學家的思想。而深植於臺北高校的自由自治精神，也引領著他不斷自我探索並覺醒，最終讓他將臺灣從權威時代的桎梏中解放出來。

「在自由的校風影響下，我樂於和同學討論，努力用功讀書。在舊制高校的課程中，英文書不用提了，就連法文書和德文書，也都是要求讀原著。哥德的《浮士德》、尼采的《查拉圖斯特拉如是說》等等。

讀書需要時間。我在筆記本上逐一記錄讀了什麼領域的書，有哲學、歷史、倫理學、生物學、科學。高校畢業時，光是岩波文庫的書我就擁有七百多本。

西田幾多郎的《善的研究》、和辻哲郎的《風土》、歌德的《浮士德》與《少年維特的煩惱》、杜斯妥也夫斯基的《白癡》、托爾斯泰的《戰爭與和平》等，很多書都影響了我的人生觀。若真要選一本的話，我會挑十九世紀英國思想家湯瑪斯卡萊爾的《衣裳哲學》。」

——李登輝《新·臺灣的主張》



李登輝校友(右四)與臺北高校國語科
犬養孝教授(左二)同遊林本源宅邸

2013年，李登輝校友返回母校，以臺北高校學長的身分為現在的臺灣師大學子們演講。他表示，當年不斷地省思、否定、蛻變，促使自己思考並朝著目標前進，並認為活著就該做一點對社會有幫助的事。他期許臺灣師大的年輕人在新時代的考驗中擔負起使命，建立屬於臺灣的認同觀，讓臺灣走出自己的路。

李登輝校友終生堅持著為臺灣未來奮鬥的決心與職志。他積極培育後進、推動農業與經濟改革，盡己所能地為臺灣奠定豐厚的根基，而臺北高校時期所陶冶的進步思想，更讓這位被譽為「臺灣民主先生」的大學長，成為推動國家民主化與本土化工程的巨人。



李登輝校友參加臺北高等學校
創校 90 週年同學會 (2012)

民主先生 (ミスターデモクラシー) 李登輝と 台北高校

李登輝前総統はかつて、「台北高校で勉強した2年半は、私が生涯で歩むべき道に影響を与えた」と語った。

李前総統は1941年にエリートへの狭き門と呼ばれる台北高等学校に合格し、文甲クラスを専攻した。卒業後、まず京都帝国大学及び台湾大学で学び、そしてアメリカの有名校であるアイオワ州立大学及びコーネル大学で農業経済学の修士号と博士号を取得した。その後、台北市市長、台湾省政府主席、中華民国第七代副総統に就任。1996年には、中華民国史上初の直接国民選挙で選出され総統になり、「台湾民主先生(台湾のミスターデモクラシー)」と呼ばれた。

広く深い学識と教養を重んじる台北高校の気風は、李氏が民主改革に踏み出す道へ影響を与え、また鍵となった。当時、同世代間での話題はマルクス、ゲーテ、カント、ソクラテスなど西洋の哲学者の思想についてだった。そして台北高校に根付く自由自治の精神は、絶え間ない自己探求を先導し、覚醒し、最終的に彼を権威の時代の束縛から解放させた。



李登輝氏(前列右方)と友人
淡水公学校にて(1943)



台北高等学校創立90周年同学会に
参加した際の李登輝氏(2012)



自由な校風の下、私は級友たちとの議論を楽しみ、大いに読書に励んだ。旧制高校の授業では、英語の本はもちろん、フランス語やドイツ語の本も、ほとんど原著で読まされた。ゲーテの『ファウスト』やニーチェの『ツァラトゥストラかく語りき』など、どれも原書で読んだ。文法の授業なんてない。自分で勉強しろという調子だった。

本を読むには時間がかかる。そこで私はノートにどんな分野の本を読んだか、いつまでに読むかを逐一メモしていた。哲学、歴史、論理学、生物学、科学。ほんとうに、ありとあらゆる分野の本を読んだ。高校を卒業するまでに、岩波文庫だけで七〇〇冊以上はもっていた。

西田幾多郎の『善の研究』、和辻哲郎の『風土』、ゲーテの『ファウスト』『若きウェルテルの悩み』、ドストエフスキーの『白痴』、トルストイの『戦争と平和』など、私の人生観に影響を与えた本は多い。一冊を選ぶとするならば、十九世紀の英国の思想家、トマス・カーライルの『衣裳（衣服）哲学』を挙げる。

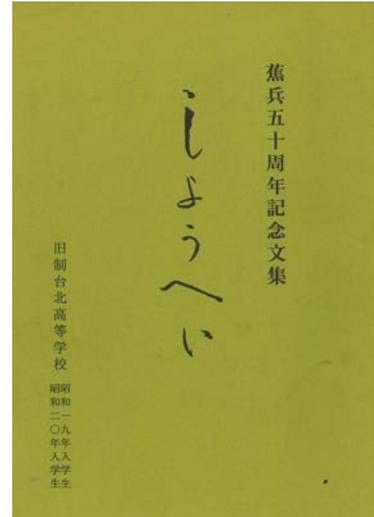
2013年、李氏は母校に戻り、台北高校の先輩として師範大学の学生達に講演をした。、反省し、否定し、変化し、自分で考えそのまま目標に向かって進むこと、また、生きてる間は少しでも社会の為になることをするべきだという考えを彼は常に持っていたと語った。そして師範大学の若者達が新時代の試練の中で使命を担い、台湾に属するアイデンティティを築き上げ、台湾に自分の道を歩かせることを期待していると述べた。

李氏は、生涯台湾の未来のために奮闘する決意とその職に対する責任を守り通してきた。彼は積極的に次世代の育成に努め、農業と経済改革を促進した。また台湾の為にできうる限りの確かな基盤を築いてもきた。台北高校時代に薫育されたその先進的思想により、「台湾民主先生（台湾のミスターデモクラシー）」と呼ばれるに至った。この先覚者は、国家の民主化とローカライゼーション（地域化、現地化）を推し進めた、正に大きな中枢だった。

（木立翼 訳 / 津田勤子 校訂）

蕉兵會的成立及其活動

——1990年代迄今



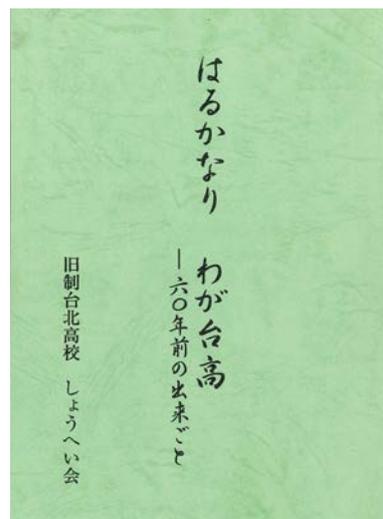
蕉兵五十周年記念文集
《蕉兵》(1996)

「蕉兵」是1944年與1945年入學臺北高校，1945年3月因召集令發動而集體入伍的高等科一、二年級生。他們成為陸軍二等兵，前往草山（陽明山）等地，主要從事構築防備美軍登陸的工程等，在山中過著辛苦的軍隊生活。戰爭結束後雖然陸續復學，但臺北高校經過接收變成「臺北高級中學」，不久日本人接受遣返回國，蕉兵們各奔前程。

1950年代以降，蕉葉會（詳見《臺高·師大通訊》創刊號）逐漸定期地舉辦活動，但蕉兵經驗者才剛出社會，因此出席人數不多。1990年前後年約六十歲的他們，以當年入隊日與「廢校」日為約，每年聚會兩次。1993年10月起，蕉兵會固定在東京有樂町的「赤ちょうちん」餐飲店聚會。

（經營者是臺灣人翁女士）參加者以住在東京與附近縣市的蕉兵為主，每次安排報告者，聚餐同時可以得知成員的專業心得並進行討論。第一次主講人為大森敏生（曾任岡三證券副社長），題目就是談證券。2002年6月第一百次例會的大合照相當珍貴，收錄於上井良夫《七星が嶺に霧まよふ（補遺）》（2003年）。

蕉兵會的活動，竹內昭太郎先生（1927年出生於臺北市，1944年從尋常科升入高等科）的貢獻非常大。他戰後先轉入松江高等學校，再轉入東京的第一高等學校，東北大學法學部畢業後任教千葉縣立木更津高校，然後任職法務省入國管理局。竹內負責舉辦及主持例會，健談幽默。且記憶力極佳，著作《臺灣島は永遠に在る》



《遙想我們臺高：60 年前的往事》
(2005)

(1990 年) 是了解戰爭結束前後臺灣史的重要資料。蕉兵會曾刊行紀念文集，致力於留下寶貴的證言，亦收錄臺灣人蕉兵 (王萬居醫師、蘇仲卿教授、呂耀樞醫師等人) 的文章。

今年由於疫情影響，2~5 月停止舉辦，6 月為逝世的堀之內三夫與山田新一舉辦追悼會，7 月迄今尚無聚會。所幸在會友高橋潤子女士協助下，改成「メール & FAX によるしょうへい会」，利用電子信件與傳真蒐集會員竹內昭太郎、吉見吉昭、豐澤弘毅、川平朝清 (連載〈我が『起承転転』90 年の生涯〉)、伊藤圭典、藏原一郎、田島覺，以及會友們的文章。甫於 9 月發行的第三期，設定兩個主題：「對 NHK 影片『路』的觀後意見」及「對李登輝前總統逝世的感想」。長年從事口述歷史的會友

所澤潤教授指出，李繼任總統之初，日本對於這位受過日本高等教育的國家元首究竟能否施展手腕，頗為關注，證諸後來臺灣的各項改革，顯見其體現了舊制高校文化。並指出李登輝的學思奠基於臺高時期的教育，其施政受到臺高人脈乃舊制高校畢業生們的支持。

筆者留日期間曾參加蕉兵會數次，有機會親近德丸薩郎、川平朝清、園部逸夫、伊藤圭典等人，以及會友齋藤毅 (前臺灣協會理事長) 等人，獲益良多。蕉兵會活動至今已三十年，極為難能可貴。謹此祝福高齡九十多歲的會員們健康，2022 年共同迎接百年校慶的到來！

國立臺灣師範大學 歷史系
王麒銘 助理教授

しょうへい会の成立と その活動

— 1990年代から現在まで

「しょうへい（蕉兵）」とは、1944年、1945年に台北高校に入学し、1945年3月に召集されて集団で入隊した高等科の1、2年生を指す。陸軍二等兵となった彼らは、アメリカ軍の上陸阻止に向けた準備を中心に、草山（現在の陽明山）などの山中で厳しい軍隊生活を送った。戦争の終結に伴い、次々に復学したものの、台高はすでに接収されて「台北高級中学」となっていた。ほどなくして日本人は日本へ引き揚げ、彼らはそれぞれの道を歩むこととなった。

1950年代以降、蕉葉会（『台高・師大通信』創刊号参照）は、徐々に定期的に開催されるようになっていた。ただし、しょうへいメンバーは社会に出たばかりでもあり、なかなか出席できなかった。1990年、還暦前後の年齢となった彼ら「しょうへい」は、当時の入隊日と「廃校」日に合わせ、年2回集まりを持つようになっていた。

1993年10月からしょうへい会は、東京有楽町で台湾人翁女史が経営する「赤ちようちん」で食事会を定例で行うようになった。

参加者は、首都圏に暮らすしょうへいが中心。毎回、発表者を定め、食事をしながら知識を得、皆でテーマに関する討論を行う、というスタイルを取った。

初回は、元岡三証券副社長の大森敏生が「証券の話」と題して発表者を務めた。2002年6月に行われた100回目の例会で撮影された貴重な写真は、翌2003年に作成された上井良夫の『七星が嶺に霧まよふ（補遺）』に収録されている。

こうしたしょうへい会の活動は、世話人を務める竹内昭太郎によるところが大きい。竹内は、1927年台北市に生まれ、1944年に尋常科から高等科に入学。戦後、松江高等学校を経て東京の第一高等学校に転入し、東北大学法学部を卒業。千葉県立木更津高校に一旦職を得るも、その後、法務省入国管理局に入局した。

例会における竹内は、ユーモアたっぷりに進行する。その抜群の記憶力は、1990年に著した自著『臺灣島は永遠に在る』に遺憾



2017年8月蕉兵会での記念撮影

毎日新聞鈴木玲子氏ご提供

なく発揮されており、同書は終戦前後の台湾史の重要資料となっている。また会で発行した記念文集には、王萬居医師、蘇仲卿教授、呂耀樞医師ら台湾人で蕉兵となった方々の、貴重な記録が取められている。

新型コロナウイルスの影響を受けた今年2月から5月まで開催は見送られ、6月には堀之内三夫と山田新一の追悼会を兼ねて開かれたものの、翌月以降、開かれていない。高橋潤子女史の協力を得て、「メール&FAXによるしょうへい会」として、電子メールとファクスによって、竹内昭太郎、吉見吉昭、豊澤弘毅、川平朝清（「我が『起承転転』90年の生涯」を連載）、伊藤圭典、蔵原一郎、田島覚ら各氏に会友の文章を加え、交流を続けている。

9月発行の第3期では、「NHKドラマ/小説『路』に対する意見」「李登輝元総統逝去に際しての所感」という2つのテーマが設定された。この中で、長年、オーラルヒストリーに取り組んできた所澤潤教授は、李登輝が総統に就任した際、日本では日本の高等教

育を受けた人物として注目が集まったが、その後の目覚ましい台湾の改革ぶりはまさに旧制高校の文化を体現しており、台北高等学校の教育が李登輝の基本的な考え方を、同校およびその他の旧制高校の人脈が彼の政治を支えていた、と指摘する。

筆者は、日本に留学していた間、何度か会にお邪魔したことがある。徳丸薩郎、川平朝清、園部逸夫、伊藤圭典ら各氏と直接お話できただけでなく、斎藤毅前台湾協会理事長らからも大いに学ぶことができた。

しょうへい会の活動は今年で30年を迎えた。極めて得難きことと深く感じ入る次第である。卒寿を超えた会員の皆様方のご健康を祈念しつつ、台北高等学校百周年を皆様と共に迎えらるる日を待ちたい。

(田中美帆 訳)

国立台湾師範大学 歴史学科
王麒銘 助教授

蕉葉與木鐸： 從百年學校記錄／ 轉譯國家與地方文化記憶



創建於1922年的臺北高等學校在戰後由臺灣師範大學所接續。臺師大承襲了臺北高校的建築、圖書、文物、設備、器物，甚至是教職員，由臺高一師大所共構的近百年歷史，不僅是臺灣教育史上最精采的一頁，而且，從這百年老校畢業的校友們也活躍於社會各個領域，在臺灣現當代的歷史上留下不可抹滅的足跡。

在這坐落於古亭町一和平東路上的美麗校園裡，有太多值得我們記錄的故事。臺師大臺灣史研究所的蔡錦堂教授自2005年便開始對臺北高校的歷史展開追蹤與研究，並帶領學生進行臺北高校畢業生的系列訪談，收集相關的相片、畢業證書、畢業紀念冊、日記、上課筆記等文物。而2007年圖書館與臺史所合辦「臺北高等學校85週年文物展」，邀請臺、日校友

參加，校方並於圖書館八樓開設「臺北高等學校資料室」。

然而，臺北高校的歷史不應僅僅是後繼者臺師大的資產而已，它更是臺灣很重要的文化記憶。因此，在前述的基礎上，臺師大進一步集結了校內的臺灣語文學系、資訊教育研究所、圖書資訊學研究所的師生，以「蕉葉與木鐸：從百年學校記錄／轉譯國家與地方文化記憶」為名，獲得文化部高額的補助，而將臺北高校的歷史與文物納入由國家所建置的文化記憶庫當中。

這個計畫的主要工作，就是蒐集並建置從臺北高校到戰後初期師範學院時期(1922-1949)相關的歷史文化資料庫，特別是全力搶救臺北高校因日久而散佚的

文物。同時，也深感文化的傳承除了保存之外，更有賴於創新。而現下數位科技及媒體技術的發展日新月異，一般大眾尤其是年輕世代，對於文化的接受方式也迥異於以往。因此，為了讓這段值得記憶的歷史及其所衍生的文化能夠觸及到更多的人們，本計畫也致力於運用並活化臺高一臺師的文化資源材料與古蹟建築，進一步連結校友、創意社群、在地社區以及專業的文創業者，展開共創協作的推廣與轉譯，讓日治而至戰後初期臺灣的教育環境、文化與社會氛圍、知識分子的日常生活等，藉由臺高一臺師相關歷史的再建而得以重新賦形。

要強調的是，這個計畫的目的並不僅僅在於記錄一校的歷史，而是將之作為認識臺灣歷史的重要起點，進而追索以之為

中心向外擴散的文化足跡。此外，本計畫也不只是將辛苦徵集而來的文物僅僅作為學校的珍藏而置於校史館內供人憑弔而已。臺高一臺師一路走來參與了臺灣百年的歷史建構，因此也早已成為臺灣的文化肌理。透過「蕉葉與木鐸」計畫的執行，讓珍貴的歷史文物可以同時成為國家的文化資產，並且，讓史料從學術論文與圖書館的陳列室中走出，透過文化的創意與再造，讓今人了解原來歷史未曾遠去，文化的記憶依舊為我們所共有。

國立臺灣師範大學 臺灣語文學系
林巾力 教授

文化部「國家文化記憶庫」計畫補助本校計畫重點：

期程	計畫工作項目	計畫目標
第一年	相關文物的徵集與記錄	口述訪談與文物徵集
	文化資源材料的數位化與詮釋	資料數位化與建置優化
	推廣及培力群眾自主投入共創協作 I	舉辦「日記解讀班」讀書會 舉辦文學院「人文知識轉譯實作競賽」
第二年	推廣及培力群眾自主投入共創協作 II	舉辦「人文知識轉譯培力講座」
	深度轉譯在地知識與文化記憶	製作桌遊、擴增實境 App、 開發深度旅遊路線
	學術會議與媒體宣傳	舉辦工作坊，文物策展、音樂會、 連結校內外媒體宣傳

蕉葉と木鐸： 百年の学校記録／ 国家と地方文化の記憶の転訳

1922年に設立された台北高等学校は、戦後に台湾師範大学へと引き継がれた。台北高校の建物、書籍、文化的資財、設備、用具、また教職員に至るまでを台湾師範大学は受け継ぎ、台北高校から師範大学によって築き上げられた百年近い歴史は、台湾教育史上最も素晴らしい一頁となった。それだけにとどまらない。この百年続く歴史ある学校の卒業生達も各分野で活躍し、台湾の現代史に消えることのない足跡を残した。

古亭町、現在の和平東路に位置する美しい校内には、多すぎる程に私達についての物語が記録されている。台湾師範大学台湾史研究所蔡錦堂教授 2005 年から台北高校の歴史の探索と研究を始め、学生を引率し台北高校卒業生への聞き取り調査、写真、卒業証書、卒業アルバム、日記、授業ノートなどの史料収集を行った。また 2007 年には図書館と台湾史研究所が共同で「台北

高等学校創立 85 周年文化財展」を開催し、台湾と日本の卒業生を招待。図書館八階には「台北高等学校資料室」を開設した。

台北高校の歴史は後継者である台湾師範大学の資産であるだけでなく、台湾の非常に重要な文化記憶でもある。したがって、前述の通り、台湾師範大学はさらに学内の台湾語文学学科、情報教育研究所、図書情報学研究所の教師たちを集め、「蕉葉と木鐸：百年の学校記録 / 国家と地方文化の記憶の転訳」というプロジェクトを立ち上げ、文化部から高額の補助金を獲得。台北高校の歴史と文化的財産を、国により設立された文化記憶倉庫（文化記憶データベース）に納めることができた。

このプロジェクトの主な仕事は、台北高校時代から戦後初期の師範学院時代 (1922-1949) までに関連する歴史文化資料の収集とそのデータベースの開設である。特に台北高校の、歳月の流れによって失わ

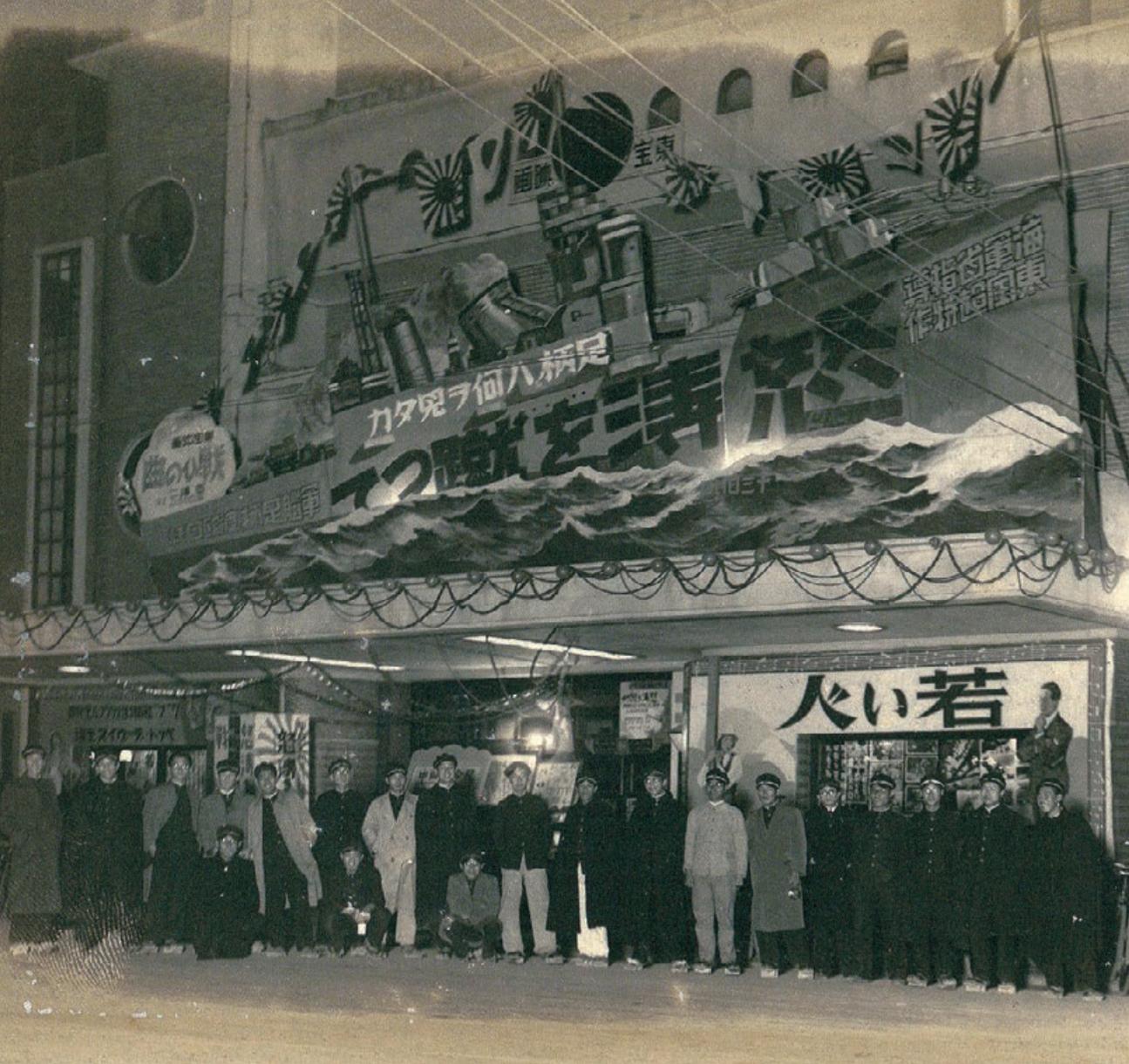
れつつある文化的資産は、一刻も早い収集と整理が必要であると考えられている。と同時に、デジタル科学技術とメディア技術が日ごとに発展している現状を鑑み、文化の伝承はそれを保存する以外に、革新的な方法にも頼らなくてはならない。また、一般社会、特に若い世代の文化の受け入れ方は以前とは異なることにも留意すべきである。したがって、将来に残していく価値のあるこの歴史と、そこから派生した文化に触れられる人々をより増やしていくために、台北高校から台湾師範大学の文化資源及び古跡建造物の応用と活性化、さらに卒業生、創作コミュニティ、地域コミュニティ、専門家との連携、共同創作と転訳の展開にも力を入れている。日本統治時代から戦後初期までの台湾の教育環境、文化と社会の状況、知識人の日常生活などを、台北高校から台湾師範大学までの歴史によって新たな形式で再構築したいというのが、このプロジェクトの趣旨である。

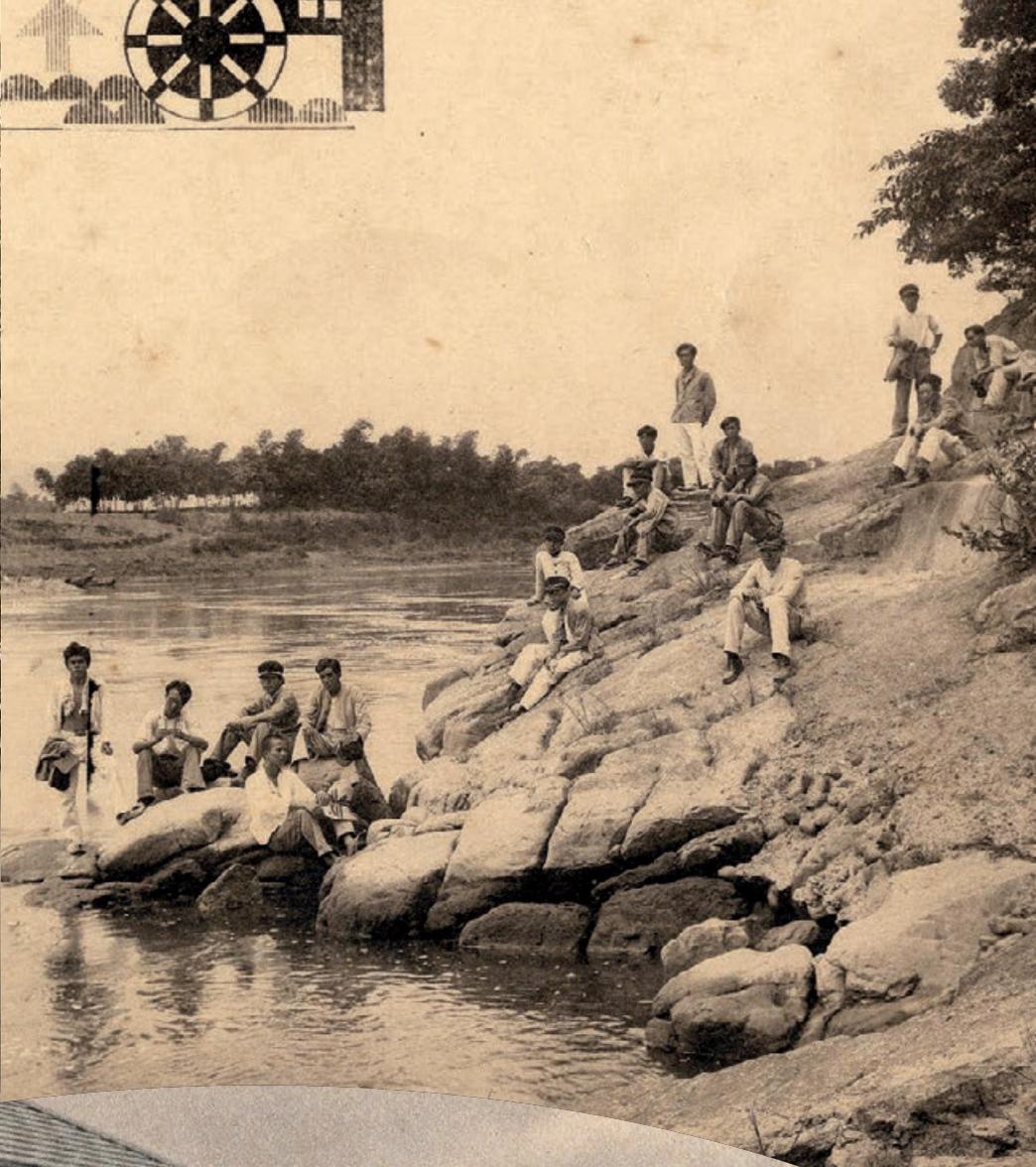
一学校の歴史の記録にとどまらず、それを台湾の歴史を知る起点とし、さらに内から外に広がる文化の足跡を探求することが、このプロジェクトの目的である。苦勞して収集した文化的財産をただ学校の所蔵品として校史館に置き、懐かしんだり惜しむためだけではない。台北高校から台湾師範大学に至るまでの道のりは、百年にわたる歴史の構築に関わり、それゆえに、すでに台湾文化の年輪になったのである。「蕉葉と木鐸」プロジェクトの実施を通し、この貴重な歴史的文化財は国家の文化資産になるであろう。、図書館の展示室から離れ、文化の新たな創作と復興を通すことで、歴史、文化の記憶は決して我々から遠く離れた所にあるものではなく、共有できるものなのだということを、多くの人々に理解してもらえるのだ。（木立翼 訳／津田勤子 校訂）

国立台湾師範大学 台湾語文学学科
林巾力 教授

文化部「国家文化記憶庫」プロジェクトに助成された作業項目：

年間予定	作業の項目	計画目標
一年目	関連史料の収集と記録	インタビューと史料収集
	文化資財のデジタル化と解説	資料のデジタル化とデータベース創設
	宣伝、一般市民が自主的に共同創作に参加するための訓練Ⅰ	「日記解読班」開講、文学院での「人文知識転訳創作コンテスト」開催
二年目	宣伝、一般市民が自主的に共同創作に参加するための訓練Ⅱ	「人文知識転訳の育成講座」開催
	知識と文化の記憶の詳しい転訳	ボードゲーム制作、AR アプリ、詳しい観光マップの開発
	学術会議とメディアによる宣伝	ワークショップ、文化財の展覧、コンサートの開催、学外のメディアと連携した宣伝

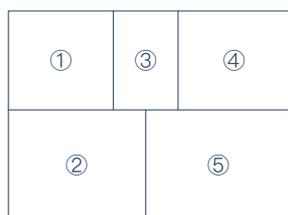




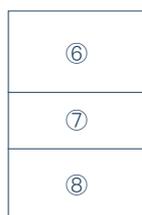




前頁照片牆



左頁照片牆



- ① 1938 年（昭和 13 年）11 理甲班的學生，穿著全套冬季制服在電影院前留影。
- ② 1938 年（昭和 13 年）11 理甲班的學生，站立或坐在通往理化教室（今已拆除）的階梯上，以及教室頂樓的女牆上合影留念。臺北高等學校的學生通常喜歡坐在這裡集體拍攝紀念照片。
- ③ 1932 年（昭和 7 年）5 理乙班八位學生，如猴子爬樹般爬到臺北新公園水池旁的大樹上合影。（學生由左至右為：塩澤喜彥、小川健次、高羽貞義、林耀堂、外田正文、黃榮華、大竹邦彥、荒木宣夫。）
- ④ 1933 年（昭和 8 年）6 文甲班的學生，在新店溪溪水旁的岩石岸上合影。
- ⑤ 1933 年（昭和 8 年）6 文甲班的學生，在學生宿舍「七星寮」中間的草坪上舉行活動時的情景。
- ⑥ 1938 年（昭和 13 年）11 文甲班的學生，在學生宿舍「七星寮」內聚會飲酒、放浪形骸歡樂合影。
- ⑦ 1932 年（昭和 7 年）5 理乙班學生，在街頭集體一起享受小吃美食，滿足口腹之食慾的合影情景。
- ⑧ 1939 年（昭和 14 年）12 文甲班的學生，圍著長條方形桌舉行學生聚會時的合影。（本班導師為石魯黑平）

（本部分照片及說明取自文化部國家文化記憶庫收存系統）



轉譯百年校史 校友徐聖凱博士 談臺北高校的精神傳承

2019.11.12

臺灣師範大學「2020 人文知識轉譯實作競賽」為人文季系列活動之一，旨在鼓勵同學們以自身的人文知識為基礎，透過跨領域的方式提出具實用性和社會共感的作品。本次競賽搭配的培力課程邀請到《日治時期臺北高等學校與菁英養成》一書的作者徐聖凱博士蒞臨演講。徐博士透過高校時期的史料談起對校史的追索，重構菁英教育下的自由學風與生活圖像。

研究也方興未艾。關心校史發展的吳正己校長也蒞臨本場講座，他在會後的交流中也提及追溯校史的重要性，而臺灣師大也產出許多校史探索與轉譯的豐碩成果，除了美術系陳中寧校友所繪的《臺北高校物語》漫畫之外，承辦文化部國家文化記憶庫專案的「蕉葉與木鐸：從百年學校記錄／轉譯國家與地方文化記憶」計畫也正在密切進行中。

(白鎔維 撰)

在 2018 年底，師大透過校務會議正式將臺北高校納入校史，與臺北高校相關的

百年の学校史を訳す 卒業生・徐聖凱博士が 台北高校の継承の精神を語る

師範大学で開催された「2020 人文知識転訳創作コンテスト」は、人文シーズンの行事の一つで、学生自身の人文知識を基礎として、様々な領域を跨いだ方法で、実用性と社会的常識を兼ね備えた作品の制作を奨励することを目的としている。今回は能力開花の課程と組み合わせ、『日治時期臺北高等學校與菁英養成』（日本統治時代の台北高等学校とエリート養成）の著者である徐聖凱博士に臨席と講演を招請した。徐博士は台北高校の歴史資料を用いて、学校史の探究についてまず語り、エリート教育における自由な学風と学生生活について概説した。

2018 年末、師範大学は学務会議で大学の歴史を台北高校であった時期まで遡り取り入れることを正式決定。台北高校関連の研究も、積極的に推し進めていくことになった。学校史の発展に関心の強い呉正己校長も今回の講演会に臨席し、講演後の交流の場でも学校史の遡及の重要性について述べた。師範大学では学校史の研究と史料の転訳作業が既に多くの成果を出してい



る。美術学科の卒業生である陳中寧氏による『漫画台北高校物語』の他に、文化部国家文化記憶庫特別プロジェクト「蕉葉與木鐸：從百年學校記錄／轉譯國家與地方文化記憶」（蕉葉と木鐸：百年の学校記録／国家と地方文化の記憶についての転訳）なども進行中である。

（木立翼 訳／津田勤子 校訂）

師大人文季人文知識轉譯實作競賽 科技與人文的創意跨界

2020.06.08



「2020 人文知識轉譯實作競賽」於 5 月 25 日在文薈廳舉辦入圍團隊的成果展示，參展的各項作品都非常精彩。此次競賽主題多元，其中，以校史為題的「師大記憶轉譯組」也有不少團隊投件。

本次競賽頒獎典禮於 6 月 8 日舉行，得獎團隊中有兩組為「師大記憶轉譯組」的參賽組別，在這兩組以臺北高校為主軸的作品中，〈憶師憶由〉將臺北高校的人物與日治時期大事交織設計成桌遊，以「自由」作為遊戲主軸，結合歷史、公民教育、地理等社會學科的跨領域整合，促使玩家反思自由的可貴；而〈臺師大校齡陡增——臺北高校時期之記憶傳承與推廣〉則是以宣傳、桌遊、導覽的三階段規劃，推廣臺北高校的校史記憶與其人文精神，讓師大校園內的臺北高校記憶能藉由轉譯實作而得以長存。在此次競賽中，參賽同學們結合了多元媒體、展現出創意加值的實作能力，除了跟上未來的科技發展趨勢，也挖掘出人文學科的獨特性及重要性。

(白鎔維 撰)



師範大学人文シーズン・人文知識転訳創作 コンテスト 学術と人文創意のクロスオーバー



5月25日、文薈廳（旧、生徒控所）で「2020 人文知識転訳創作コンテスト」審査結果の発表があった。出品作品はどれも異彩を放つものばかりだった。作品のテーマは多岐にわたり、その中でも学校史をテーマにした「師大記憶轉譯組」（師大記憶轉訳グループ）が多くの作品を出品した。

授賞式は6月8日に行われ、受賞グループのうち2つが「師大記憶轉譯組」のグループだった。この2グループは台北高校を主軸にした作品を制作したが、「憶師

憶由」は台北高校の人物と日本統治時代の重要な出来事を織り交ぜボードゲームに仕上げた。「自由」をゲームのコンセプトにし、歴史、公民教育、地理など社会科学の領域を結合しまとめることで、プレイヤーに自由がいかにか尊いものか再認識を促す仕様になっている。また「臺師大校齡陡増—臺北高校時期之記憶傳承與推廣」（師大創立年数急増—台北高校時代の記憶の継承と普及）は宣伝、ボードゲーム、ガイドの3段階で構成されている。台北高校の学校史よりも人文精神のほうを強調し、師範大学内で台北高校の記憶を転訳によって末永く保存することができることをアピールしている。今回のコンテストでは、参加した学生達が多種多様なメディアを結合し、強い創作能力を発揮。科学テクノロジーの応用はもちろん、人文科学の独自性と重要性も掘り起こした作品を作り上げた。

（木立翼 訳／津田勤子 校訂）

國立臺灣師範大學出版中心

典藏臺北高校

臺北高校徽章



NT. 85

此徽章為當代畫家鹽月桃甫設計，以三片芭蕉葉組合成正三角形，蕉葉象徵著勝利、正義、向上；三角形表平等、安定、進步，葉尖以椰子樹葉設計尖角，意味著各學門並重而不偏頗，蘊含臺北高校的學風與美德承襲。

高校鐵盒明信片



NT. 420

明信片共 8 張含有兩款圖案，一款是高校時期的老照片，一款則是 1928 年高校第一次校慶時所發行的明信片，另有 4 張仿舊風格的貼紙，及高校紀念徽章。復古的設計，搭配鐵盒包裝，極富紀念價值。

高校 90 週年紀念明信片



NT. 125

由高校學生藏本人司所繪製的臺高生百態明信片，呈現當時學生生活的樣貌，共分 A、B 兩款，每款各 8 張，趣味十足。

臺師大 × 自由之鐘紀念風鈴



NT. 3700

『臺師大 x 自由之鐘紀念風鈴』，磷銅製鐘體一面刻有師大校徽，一面則為高校校徽。搭配一面烙有師大校訓「誠正勤樸」，一面臺北高校學風「自由自治」之木牌，按照原鐘比例手工打造，將歷史與精神揉合並傳承。

國立臺灣師範大學出版中心

電話：(02)7749-5291

信箱：libpress@ntnu.edu.tw

網站：請掃 QR code



菁英、文藝與戰爭——
由舊制台北高等學校傳
閱雜誌《雲葉》與《杏》
看菁英學生的精神樣貌



NT. 490



本書藉由分析台北高等學校的學生於太平洋戰爭最激烈的日治末期(1943年)自主創刊的傳閱雜誌《雲葉》與《杏》，論證戰爭時期菁英學生的精神樣貌。《雲葉》是1940年入學的學生們，在就讀尋常科四年級時所發行的班級雜誌。《杏》則是以台北高校高等科二年級與三年級的三位理科生為中心所發行的雜誌。

本書は『戦時下台湾の高等学校生と文芸』と題し、1940年代太平洋戦争下の台北高等学校における台湾人及び日本人学生達の文芸活動、そしてその作品を通して当時のエリート学生達の精神史を見つめたものである。

作者：津田勤子

出版：2018/12

ISBN：9789865624491

日治時期臺北高等
學校與菁英養成



NT. 500

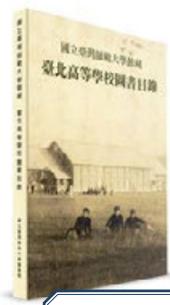
國立臺灣師範大學前身——臺北高等學校，是培育日治中期以降與戰後臺灣知識菁英的搖籃。本書以臺灣歷史研究的主體立場出發，除探討臺北高校設立過程與運作方式，尤其重視知識菁英的塑造、意識與發展歷程，論述中突顯出殖民地高校的特色，亦對臺灣高等教育史、日本舊制高校研究有補遺之功。

作者：徐聖凱

出版：2012/10

ISBN：9789577527417

國立臺灣師範大學
館藏——臺北高等
學校圖書目錄



NT. 400

本書將國立臺灣師範大學於高校時期的藏書做了一番整理，內容包含吳聖雄教授撰寫的〈臺灣師範大學圖書館藏日文舊籍的過去、現在與未來〉與王秀雄教授撰寫的〈臺灣師範大學圖書館藏美術日文舊籍介紹〉。特別獨立出「臺北高等學校圖書館圖書分類表」供研究者利用，並提供「題名索引」以利查找。

出版：2012/10

ISBN：9789577528025

白線帽的青春——
臺北高等學校歷史
紀錄片



NT. 300

(家用版)

臺北高校是一間什麼樣的學校？在這個學校中，有一群年輕人沉浸於菁英教育的殿堂中，自由、多元、狂熱的吸收著各種思想文化潮流。他們認為，臺北高校的就學生涯啟發了他們面對學問的態度，深刻影響了日後的人生觀。他們在不同領域發光發熱，影響日後的臺灣社會發展。

作者：國立臺灣師範大學圖書館

出版：2012/10

規格：光碟片 DVD



通訊聯絡欄

國立臺灣師範大學為充實校史資料，致力於蒐集日治時期臺北高等學校相關資料，經整理後加以公開，期能促進各界認識本校的歷史。圖書館校史特藏組懇請本刊讀者協助提供訊息及捐贈資料予本校典藏，詳見如下所列各項。

- ① 歷代校長的個人資料 (松村傳、三澤糾、下村虎次郎 / 湖人、谷本清心、下川履信)
- ② 臺北高校教授、職員的個人資料
- ③ 畢業生及終戰時在校生的個人資料 (同上)
- ④ 二次大戰時期臺北高校師生的生活史、戰死的教職員生的相關資料
(例如：證書、照片、日記或手稿、筆記、相簿、回憶錄、追悼錄、相關物品)
- ⑤ 同窗會 (各班)、蕉葉會、蕉兵會的相關資料 (例如：名簿、會報、文集等)
- ⑥ 臺高會 (臺北高校同學會) 的相關資料 (同上)

有意寄贈資料者，煩請撥冗寫信至 ntnuhis@ntnu.edu.tw 與我們聯繫，謝謝！

国立台湾師範大学では、日本統治時代に台北高等学校で学ばれた卒業生、あるいは当校に関係する方々の関連資料を広く収集しております。

校史の充実と関係者の交流促進に向け、収集した資料は整理を経て、一般公開の予定です。皆様のお手元に当時の関連資料や情報がございましたら、国立台湾師範大学図書館の校史特蔵組までご一報いただければ幸いです。

現在、特に次のような資料を探しております。

-
- ① 松村伝、三澤糾、下村虎次郎 / 湖人、谷本清心、下川履信といった歴代校長の個人資料
 - ② 教職員に関する資料
 - ③ 卒業生もしくは終戦時の在校生に関する資料
 - ④ 戦時下の台北高校や学徒兵、戦没死された教職員・卒業生の関連資料
 - ①～④については、各種証書、写真、日記や手記、授業ノート、卒業アルバム、書類、冊子、回想録、追悼録などを探しております。
 - ⑤ 各クラスの同窓会、蕉葉会、蕉兵会に関する資料
 - ⑥ 台高会（台北高校同学会）に関する資料
 - ⑤～⑥については、名簿、会報、文集などを探しております。
-

上記のような資料のお持ちの方、あるいはご寄贈いただける方がいらっしゃいましたら、ntnuhis@ntnu.edu.tw までご連絡ください。（田中美帆訳）

乘風^翺翔的白線帽

李登輝先生與臺北高校・臺灣師大特展



9/18 10/15
2020 五 — 四

地點/國立臺灣師範大學圖書館一樓
主辦單位/國立臺灣師範大學圖書館



尋常見不凡

臺北高等學校植物標本特展



9/18 → 10/15

國立臺灣師範大學 文薈廳
臺北市和平東路一段162號

開放時間：週一至週五上午八時至下午八時
(例假日及國定假日不開放)

主辦單位：國立臺灣師範大學 圖書館



(活動網站)





邀您一齊為即將邁入百年的師大引燃照耀未來的火炬。

一所偉大的學校的誕生，來自師生與社會先進的共築與牽成。從臺北高校到師大，經歷了近一世紀的淬煉，在時間長河中拖曳出恆久不滅的軌跡，每一段燦燦生輝的校史，都鎔鑄了你我跨越世代的企盼與期許。希望此刻正在閱讀《臺高·師大通訊》的您能一同成為師大銘刻這份榮耀的力量，讓百年名校屹立於此，感動更多的人。

【校務發展】

延續臺北高校自由自治的精神，在師大多元而進取的校風下，陸續增設引領社會脈動的新系所，師大致力於國際化並與產業連結，同時串聯起堅實的校友網絡，讓學校成為充滿生命力的有機體。

【接軌世界】

面對國際化的浪潮，師大始終御風前行，正因為歷經風霜，而能無所畏懼，不僅遠颺國際學界、為臺灣開拓豐碩的學術成果，更禮聘海外優良師資及研究人才來臺，創造全球化的學習環境。

【優化校園】

建成近一世紀的校園，是無數知識與意念碰撞的殿堂，為了承載智慧的永恆，老舊的建物也亟需修繕與改造，師大積極翻新教學現場的軟硬體設備，讓教學環境能更為貼近當代趨勢。

【臺高計畫】

本計畫致力於收集並整理臺北高校的文物、並將之進行數位化。為觸及更多大眾，本計畫也擬活用臺高的文化資源材料，進一步連結校友、創意社群以及專業的文創業者，展開跨領域之推廣與轉譯。

在閱讀完本期通訊後，若您心中也萌生了對校史的感動，
誠摯邀請您指定捐款予【臺高計畫】，讓我們繼續傳遞屬於臺北高校的雋永與美好。

今期の内容は、いかがでしたか？

もし本プロジェクトに寄付をしてもいいと思われたら、ぜひよろしく願いいたします。

皆様の温かいご支援によって、

今後も台北高校と皆様の架け橋になれることを本プロジェクトのスタッフ一同願っております。

基本資料			
<input type="radio"/> 個人捐贈		<input type="radio"/> 機構團體捐贈	
姓名		機構名稱	服務單位
聯絡方式	電話：()	電子信箱	
身份	<input type="radio"/> 臺師大校友.....年.....系/所/班畢(結)業 <input type="radio"/> 在學生 <input type="radio"/> 臺師大教職員 <input type="radio"/> 家長 <input type="radio"/> 社會人士 <input type="radio"/> 企業機構 <input type="radio"/> 其他		
捐款徵信	是否願意將姓名、身分、捐款金額刊登於本校網站及刊物，以為公開徵信之用？ <input type="radio"/> 同意 <input type="radio"/> 匿名		
捐款用途	<input type="radio"/> 校務發展 <input type="radio"/> 接軌世界 <input type="radio"/> 優化校園 <input type="radio"/> 助學獎金 <input type="radio"/> 指定捐款(臺高計畫)..... * 請註明特定募款計畫或單位與用途		
捐款方式	<input type="radio"/> 現金 <input type="radio"/> 支票 <input type="radio"/> 銀行匯款 <input type="radio"/> ATM轉帳 <input type="radio"/> 線上刷卡		
收據資料	* 捐款可100%自個人當年度綜合所得/企業營利所得總額中扣除。		
抬頭名稱		寄送地址	

銀行匯款 / ATM 轉帳須知	聯絡資訊	Give to NTNU
受款銀行：中國信託商業銀行，忠孝分行，代碼(8220185) 戶名：「國立臺灣師範大學401專戶」帳號：「185350001030」 ※ 敬請填妥本同意書後，連同匯款收據或轉帳明細表傳真、郵寄或掃描後email至本校公共事務中心。	傳真：02-32684393 信箱：give@ntnu.com.tw 捐款專線：02-77491036	





中華郵政臺北
雜字第1829號
執照登記為
雜誌交寄



發行日期
2020年10月

發行人
吳正己

編輯顧問
柯皓仁、林中力、蔡錦堂
陳志洪、王麒銘

編輯小組
李怡佳、彭建森

美術編輯
潘欣玟

發行單位
 國立臺灣師範大學

共同協力
國立臺灣師範大學圖書館
文學院國際臺灣學研究中心
文化部國家文化記憶庫計畫

聯絡單位
圖書館校史特藏組
臺北市和平東路一段162號
02-7749-5281